名所物見の旅　其の伍拾九　悠久なる中国文明

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

桃売りおばさんの計略

明の歴代の天子が眠る陵墓群・十三陵に到着して観光バスを降りると、リヤカーいっぱいに桃を並べたおばさんが寄ってきて商売を始めた。収穫したばかりで瑞々しく、赤く色づいた食べ頃のおいしそうな桃である。わたしは「桃園の誓い」（三国志演義）や桃源郷の謂れとなった陶淵明の「桃花源記」を思い浮かべ、そういえば桃の原産地はこの中国だったことに気が付いた。桃は三個で20元だという。買おうか迷っていると、同じツアーに参加していた熟年夫婦がさっそく買った。バスの反対側には大柄な親爺さんがやはり桃を並べている。ガイドの雷さんがそばにいるせいか、こちらは三個で15元だといっている。5元高い買い物をした夫婦は50元札で払って30元のお釣りをもらったが、雷さんが不審を感じて奥さんがもらった釣り銭を確認すると、1元札30枚のお釣りのはずが、1角札が30枚であった。10角が1元なので3元のお釣りしかもらっておらず、熟年夫婦は結局桃三個に47元も支払ったことになる。気が付いた時には、桃売りのおばさんはすばやく消えていなくなっていた。中国の歴史は戦国の孫臏から三国時代の曹操や周愈、諸葛亮などに代表される虚虚実実の策略が我々を引き込むのであるが、こんなところでそのミニチュア版に出くわすことになろうとは。追い討ちをかけるように雷さんは「中国の桃は日本の桃ほど甘くはないですね。」これを聞いて桃を買った人たちは皆がっかり顔であった。

北京近郊の桃園では夏になると収穫の最盛期を迎え、観光地ではバスが到着すると、あちこちから桃売りが集まってくる。（明の十三陵にて）

中国文明の謎

前漢の司馬遷の「史記」によれば、中国文明は三皇五帝に始まる。三皇については神話の域を出ないが、続く五帝本紀について司馬遷は「黄帝伝説には民族風土の真実が混ざっていることは否定できない」と注釈を入れ、以降の帝王については史実として扱っている。そして五代目の舜から治水に功績を挙げた禹に帝位が禅譲され夏王朝が始まったとされる。（五帝については資料によって特定される帝王に諸説ある。）

夏王朝からは商（殷）、周、春秋戦国、秦、前漢と続き、中国文明は紀元前だけでも二千年以上の歴史がある。日本の学界ではまだ夏の存在は認められていないが、現在の発掘状況からすれば、河南省二里頭遺跡が夏王朝の遺跡と正式に承認されるのは時間の問題だと思われる。黄河流域には時代を遡ることいまから７千年前の仰韶文化（陝西省～河南省・BC4800年～）や龍山文化（山東省・BC2500年～）に代表される土器文明があり、黄河文明の淵源と考えられている。

ここまではわたしが数十年前に学校で学んだ中国史であるが、近年の発掘によってまったく新しい歴史観が生まれつつある。長江流域（揚子江）には中国最古の水稲も出土した中流域の彭頭山文化（湖南省・ＢＣ7000年～）や狩猟、漁労に加え稲作を持ち、豚の家畜化をおこなっていた下流域の河姆渡文化（浙江省・ＢＣ5000年～）などの遺跡が発掘され、1986年には上流の四川省三星堆から青銅器や怪異な黄金の仮面などが出土して高度な技術を持つ四川文明があきらかになってきた。黄河文明の夏から周の時代にかけて、長江上流にも黄河流域に匹敵する文明があったのである。黄河文明とはまったく異質な四川文明について「山海経」などの古文献には記述が散見されるが、司馬遷はまったく触れておらず、「史記」は“黄河文明のイデオロギーで書かれた”とわたしは理解している。他の王朝や権力の事績をカットすることは世界の歴史書に多く共通する問題で、我が国の「古事記」「日本書紀」も例外ではない。黄河文明は五帝から夏王朝以降、商から周まで帝ではなく王を名乗っていることからも、他の地域にも王がいたり、ひょっとすると帝を名乗る王朝の存在がどこかにあった可能性も否定できない。

周の第五代穆王（前十世紀）の陵墓から発見された竹簡には、穆王は西方に西王母という女王に会いに行き貢物を献上したと記述され（穆天子伝）、西王母を四川文明と結びつける説もあるが、穆王は崑崙山脈まで足を延ばしたとされ、行程内容からも西王母は西域の玉文明の女王と考えたほうが矛盾がないように思う。

偉大なる秦の始皇帝

戦国時代末期、秦の政（始皇帝）は最新兵器と騎馬隊や戦車などを活用して列強を次々と滅ぼし、前221年ついに中国を統一した。その支配範囲は、北は現在の瀋陽や内モンゴルからヴェトナムの首都ハノイの南まで。東は朝鮮半島北部の鴨緑江流域や山東半島から成都の西まで。これを西ヨーロッパで例えると、北はノルウェーのオスロから南はローマ。東はポーランドのワルシャワから西はロンドンまでといった広大な領域となる。

三皇五帝より偉大であるとして自ら皇帝と名乗った政は、灌漑用水路や幹線道路の整備などの土木事業を推進。万里の長城の建設。秦の都・咸陽の渭水には咸陽宮、その南に阿房宮を建設。270の宮殿と楼観を皇帝専用道路で繋ぎ、宮殿の至るところに帷張が垂らされ、鐘鼓を置き、美女が充ちていたという。阿房宮は東西675メートル、南北112.5メートルの広さで、一万人が座れる殿を持つ壮大な建築物であった。

旧態の改革を断行し、封建制度を廃して中央から地方に役人を送る中央集権体制の郡県制施行。貨幣の統一。度量衡の統一。文字を小篆に統一。また現代のような交通機関がない中で、信じがたいほど広範囲な距離にわたる五回の全国巡狩（視察）をおこなった。こうした数々の事績を成し遂げた始皇帝は、中国史上並ぶ者のない、最高のスーパースターであることに間違いない。

始皇帝陵と兵馬俑

西安市にある始皇帝の兵馬俑は巨大な体育館のような建物の中にあり、世界中からの見学者で溢れかえっていた。西安は漢代には長安と呼ばれ、中国の歴代の都があった古都で観光名所に事欠かないが、ここ兵馬俑を訪れる観光客の数は半端ではない。わたしにとっても始皇帝の兵馬俑を見るのは長年の夢であった。しかし大勢の人垣を掻き分けて兵馬俑をつぶさに観察することは並大抵のことではなく、感激するよりも最前列に割り込むことで必死になっていた。

始皇帝の兵馬俑は始皇帝陵から東1.5キロの距離にあり、1～4号抗のうち、一番大きな1号坑は東西210メートル、南北60メートルもあり、兵士や軍馬の俑が並べられて完全復元されている。2～3号抗は発掘中で、また4号抗には兵馬俑はなく、秦末の戦乱で工事中止となったまま埋もれたようだ。始皇帝の兵馬俑は全部で七千体、その顔の表情や髷は一体一体異なっている。始皇帝の兵馬俑の最大の特徴である等身大の俑を作るには、窯出し後の収縮を計算して最初に粘土で二割程度大きく作る必要があったという。兵馬俑は中国歴代皇帝の陵墓の多くで発掘されているが、漢の景帝の四～五万体にものぼる規模の兵馬俑でさえ、大きさは実物大の三分の一ほどしかなく、裸体の兵士の人形に着物を着せて手間を省いてある。そして時代が下るほど兵馬俑は、型に嵌めた既製品のような簡略化された作りになってゆく。始皇帝の兵馬俑は芸術的にも素晴らしく、兵士や馬はまるで生きているような表情を見せ、着物の皺まで表現する技術は見るものを飽きさせない。

兵馬俑抗からの出土品で特筆すべきはクロームメッキが施された剣で、二千二百年以上経ったいまも刃は物を切ることが出来るほどの鋭さを保っている。クロームメッキは工房の限られた工人だけの秘密の技術であったようで、秦滅亡とともに忘れ去られ、再びわたしたちがクロームメッキの技術を手にするのは、ドイツで工業化が成功する二十世紀になってからのことである。

兵馬俑抗の大きさには圧倒されたが、始皇帝陵遺跡のほんの一部を占めるに過ぎず、肝心の陵墓のほうはまったく手付かずの状態であった。「史記」によれば地下宮殿の入口には自動発射装置の弩（弓）が仕掛けられ、銅で造られた宮殿の中は奇宝、財宝で埋めつくされ、その周囲は水銀の川や海が配置され盗掘から地下宮殿を守っているという。最新のハイテク探査では盗掘抗は多数確認されたが地下宮殿内の盗掘は一部に留まり、多くが未盗掘の可能性が高いという。また「史記」の記述どおり、内部にはボーリング調査によって大量の水銀が確認された。歴史ファンとしては、一日も早い発掘調査が待ち望まれるところである。

秦の始皇帝の兵馬俑。発見された７千体の兵馬俑はすべて粘土をこねて手作りされ、窯焼きして製作された。等身大の兵士は一体ごとに顔の表情や髷の形、着物の皺まで違っており、鋳型で作った大量生産の既製品でないことに驚く。

北の脅威と万里の長城

始皇帝は統一を果たすと北に位置する各国の国境に作られていた城壁を繋げて防御ラインを敷いた。これがいわゆる万里の長城で、東の山海関から西の嘉峪関まで三千キロ、内外二重に造られた部分や山の起伏部分を計算すると五千キロ以上の途方もない長さに及ぶ。長城の建設理由はひとえに北方騎馬民族の侵入を防ぐためである。中国には古来、東夷・北狄・西戎・南蛮と四周の異民族を蔑む言葉があり、なかでも北狄はもっとも恐るべき相手で、険しい尾根筋に高い城壁を作って、北方の騎馬兵が乗り越えられないようにすることが長城建設の最重要ポイントであった。しかしそれでも侵入は防ぎきれず、匈奴、羯、鮮卑など異民族による五胡十六国、鮮卑族の北魏、鮮卑系の統一国家・隋と唐、契丹族の遼、女真族の金、タングート族の西夏、世界史上最大の国家を築いたモンゴル族の元、満州族（古代の粛慎）の清など中国王朝の半分は北方民族が作ったといっても過言ではない。

長城は何度も補修や新設されたが、面白いことに強大な権力を誇った隋や唐の時代にはまったく補修した記録はない。一方元を北に追いやった中国史上唯一の江南出身の王朝である明は、長城の大々的な補修や新設を行っている。

兵馬俑抗発見者の楊志発先生。数年前にクリントン元大統領が訪れた際には、元大統領に兵馬俑抗の案内をして発掘時の経緯を語った。兵馬俑は元来、色鮮やかに彩色されていて、発掘時にはその痕跡が残っていたという。

秦の滅亡と漢の勃興

前210年始皇帝は巡狩中に沙丘（河北省）で病没した。秦は宦官の趙高の悪政によって乱れ傾いていく。やがて覇を競う楚の項羽によって咸陽宮は略奪されて火を放たれ、広大な咸陽宮は三ヶ月も燃え続けたと伝承されている。その項羽も漢の劉邦に破れ、虞美人や四面楚歌の故事を残して消え去っていった。秦は中国統一から僅か十五年で滅び、代わって漢が前後400年にわたる王朝を築くのである。

八達嶺付近の万里の長城。現在残る長城のほとんどは「明」の時代（14～17世紀）に建設あるいは補強されたもので、総延長5千キロに及ぶ。長城の右側が北方民族の領域で、壁に矢を放つための切り込み窓が作られている。この写真には北方騎馬民族の風習“辮髪”をした人が写っているので、辛亥革命以前の清王朝の末期に撮影されたとみられる。

歴史は足で知るべし

日本では中国史書の表現を誇張されたものとして捉える風潮があったが、近年の発掘調査によってその記述はけっしてオーバーではなかったことが分かってきている。そして実際に訪れてみて、日本の遺跡と比べ中国の遺跡の規模は、十倍から数十倍のスケールを持っていることを実感した。現在、国土は日本の25倍、人口は10倍という数値から考察すれば、古代においてもその規模が大きく違うのは当然かもしれないが、各王朝の壮大な遺跡や現存する世界最大の宮殿「紫禁城」を見ると、そこには途方もない権力が存在していたことを如実に証明している。

百聞は一見にしかず。日本にいて「井の中の蛙」になっていたわたしは、今回の旅で現地に行くことの大切さを再認識した次第であった。